

調 査 研 究 課 題 名：小児気管支ぜん息の経年変化および地域差に関する研究

個 別 研 究 課 題 小児気管支喘息の経年変化および地域差に関する研究

調査研究代表者氏名：小 田 嶋 博

評価コメント

- ・30年継続された疫学調査であり、同一対象地区で同一手法を用いての調査という事で大変意義深い。
- ・福岡県の調査では、喘息の有病率は低下してきたという事であるが、公害助成地区のみで解析した時の有病率を出してもらいたい(福岡県のみでなく、調査された全地域での)。
- ・長年の間、同じ地域で同じ手法で、小児気管支喘息の経年変化及び地域差を調査してこられたことに敬意を表する。但し、今回の目的の一つである、助成対象地域が今年度は1か所しかできなかった点で達成度を3とした。24年度で、今回できなかった助成対象地域の調査を行い、地域差を検討して頂きたい。また、インターネット調査との比較も是非行っていただきたい。
- ・1982年以来、同一対象地域で同一手法によって実施された調査で、わが国の学童におけるアレルギー疾患、ことに喘息有症率調査として大変に貴重な研究である。福岡市の集計結果で30年目にして有症率の減少が認められたが全対象地区の結果が興味深い。
- ・学童の有症率減少の原因として、発症率の減少か寛解率の増加が考えられるが、おそらく後者と思われる。寛解率増加の要因としては、増悪因子の回避か気道炎症治療の普及が考えられるが、今回の調査結果の分析において、これらの関わりについて言及されることを期待する。
- ・次年度において、喘息が本当に減少しているのかどうか、また、減少しているとすれば、どのような理由が考えられるのか、見極めてほしい。
- ・食物アレルギーの有症率を今回の調査から取り入れているが、母集団が異なっても比較参照できる過去のデータも調べられたい。
- ・1982年から10年ごとに2012年まで4回にわたり西日本11県での学童3-5万人規模の継続的研究は貴重な科学的意義を有している。
- ・今回の調査結果では解析を終了している福岡市での喘息有症率が低下しているが、他の地域の動向がこれと軌を一にするか注目される。
- ・アレルギー疾患は増加傾向にあるが、喘息の減少傾向との対比が調査全地域でも必要である。4回の調査期間においてステロイド吸入薬の普及が異なるなど、治療の影響が学童にも及んでいる可能性を検討する必要がある。

- ・同一の地域を対象に30年間にわたって気管支喘息その他のアレルギー疾患について疫学調査を行ってきたということは、世界的にもあまり類例のないことであり、得られたデータは非常に貴重なものであり、その努力は高く評価したい。
- ・同一地域での住民の移動の程度も可能であればチェックする必要がある。気管支喘息やアトピー性皮膚炎の減少傾向が、発症そのものが減少傾向にあるのか、あるいは寛解が増えたことによるのかも明らかにしておく必要がある。今後も学校とのコミュニケーションを良好に保ってこれらの調査を継続してもらいたい。
- ・ソフト3事業に沿った30年の長期にわたる貴重な研究である。地元との信頼関係も構築されており、今回も初年度の目標について一部遅れがあるものの、順調に推移している。アンケート回収率も96%と高く、一部のデータからではあるが、喘息の有病率の減少という結果も得られている一方、喘息の寛解も増加しており、注目
- ・一方、今後紙ベースの調査の困難化、少子化による標本数も減少、住民の移動等、対策や思考を要する問題も少なくない。